

日本 LCA 学会インパクト評価研究会第 1 回研究会 議事録

日時： 2012 年 4 月 5 日（木） 17:00-18:30

場所： 工学院大学新宿校舎 19 階 1913 会議室

出席者： 嵐、井伊、伊東、稲葉、井原、大田和、菊池、久保、栗島、高橋、高宮、鄭、湯、中谷、畑山、三島、本下、吉村、津田（事務局）、河北（事務局）（順不同、敬称略）

議事：

1. 主査挨拶

研究会主査の本下より、研究会設立についての報告がなされた。

2. 参加メンバー挨拶および自己紹介

出席者から業務・研究内容および研究会参加の動機を含めて自己紹介を頂いた。

3. 話題提供

本下より、研究会設立の背景およびインパクト評価研究の概要について説明があった。研究会の設立の動機としては、日本における LCA 研究は GHG 排出量評価に関わるものが多く、欧州など海外に比べて温暖化以外の領域も含めたインパクト評価の事例が少なく、インパクト評価手法の利用方法や課題・限界などに関する議論が少ない点が指摘された。さらに、欧州における環境フットプリントの動きも含めて、インパクト評価手法（モデル）に注目した議論や新たな手法開発が日本でも必要であることが述べられた。また、これまでのインパクト評価研究について、特性化や統合化に関する解説、世界各国で開発されているモデルの紹介がなされた。

質疑では以下のような事項についての議論があった。

海外での評価事例（論文）と言っても、インベントリにモデル中で示された係数を乗じただけのような、モデルの理解や結果の解釈が不足している事例も多くみられる。

→論文として出すときのマインドの違いはあるかもしれない。ただ、解釈の度合いがどうであれユーザーが評価事例を重ねることで、手法開発者に対して改善点のフィードバックを与えることになる。また研究会では、ユーザーの解釈を助けるために評価事例の整理も行っていきたい。

現状の手法では環境影響がプラスになる場合を評価にきちんと反映できているか？温暖化は寒冷ストレスの軽減にもなりうるのでは？

→寒冷ストレスのプラスの効果も含めて評価されたモデルもある。CO₂ の施肥効果などは

議論が多く、評価の対象に含めていないケースもある。トルエンの排出も環境影響がプラスとなっているモデルもある。

影響の対象（地域性）をはっきりさせることが重要で、意思決定（重みづけ）にも関わっているのではないかと感じる。意思決定に結びつくまでの過程としてインパクト評価は重要であるが、意思決定に利用できるレベルの評価方法になっていないものもあると感じる。これらを含めて研究会で勉強し、意思決定への利用にどう生かしていくかを議論したいと思っている。

4. 研究会の進め方についての議論

今後の研究会の活動内容、頻度などについて話し合った。予定される活動は以下の通りである。

- ・ 研究会は年 4 回程度。毎回テーマを設定する。テーマは影響領域（温暖化など）でもよいし、評価対象製品（食品など）でもよい。テーマに関連した講演や文献・事例紹介をおこなう。
- ・ 全体の研究会とは別に、手法論 WG と事例 WG を設置する。各 WG では、評価手法や利用事例をレビュー・紹介し、それらをまとめたものを研究会で報告・共有する。
- ・ レビューはまとめたものを学会誌に掲載することを目指す。研究会活動で最終的には、LCIA 手法の利用に関するガイドブックを作成し、LCA 学会がオーソライズしたものとして発行できればベスト。

学会誌への投稿はいつごろの予定か？掲載するならインパクト評価の特集号にしたい。
→現段階では何とも言えない。ガイドブック作成も含め、数年かけて進めることになるのではないかと考えている。

・ 次回研究会は 6～7 月。テーマは意思決定（担当：菊池、中谷）。関連するトピックについて話題提供ができる方についても検討。後日メールベースで日程調整を行う。

以上